

# Painlevé 超越関数の値分布について

佐々木 良勝

## 目次

1	Introduction	1
2	証明の概要	3
3	各補題の証明	7

## 1 Introduction

本稿では Painlevé 方程式の値分布について紹介する。既知の結果の主要部分は Shimomoura によって得られたものであって、筆者が付け加えたものはほんの僅かである。近年のより詳細な結果についてまとめて知りたい方は、[1],[3]などを参照されたい。また、邦語で読めるものとして [5]をお薦めする。

**Painlevé 方程式** Painlevé 方程式とは次の 6 種の非線形方程式である：

( $P_{VI}$ )

$$\frac{d^2y}{dx^2} = \frac{1}{2} \left( \frac{1}{y} + \frac{1}{y-1} + \frac{1}{y-x} \right) \left( \frac{dy}{dx} \right)^2 - \left( \frac{1}{x} + \frac{1}{x-1} + \frac{1}{y-x} \right) \frac{dy}{dx} + \frac{y(y-1)(y-x)}{x^2(x-1)^2} \left[ \alpha + \beta \frac{x}{y^2} + \gamma \frac{x-1}{(y-1)^2} + \delta \frac{x(x-1)}{(y-x)^2} \right]$$

( $P_V$ )

$$\frac{d^2y}{dx^2} = \left( \frac{1}{2y} + \frac{1}{y-1} \right) \left( \frac{dy}{dx} \right)^2 - \frac{1}{x} \left( \frac{dy}{dx} \right) + \frac{(y-1)^2}{x^2} \left( \alpha y + \frac{\beta}{y} \right) + \gamma \frac{y}{x} + \delta \frac{y(y+1)}{y-1}$$

( $P_{IV}$ )

$$\frac{d^2y}{dx^2} = \frac{1}{2y} \left( \frac{dy}{dx} \right)^2 + \frac{3}{2}y^3 + 4xy^2 + 2(x^2 - \alpha)y + \frac{\beta}{y}$$

( $P_{III}$ )

$$\frac{d^2y}{dx^2} = \frac{1}{y} \left( \frac{dy}{dx} \right)^2 - \frac{1}{x} \left( \frac{dy}{dx} \right) + \frac{1}{x}(\alpha y^2 + \beta) + \gamma y^3 + \frac{\delta}{y}$$

$$(P_{II}) \quad \frac{d^2y}{dx^2} = 2y^3 + xy + \alpha$$

$$(P_I) \quad \frac{d^2y}{dx^2} = 6y^2 + x$$

これらが2階線型常微分方程式のモノドロミー保存変形により得られることが、今日では広く知られている。

**既知の結果** Painlevé 超越関数は一般に、 $P_I, P_{II}, P_{IV}$  は  $\mathbb{C}$  上有理型、 $P_{III}, P_V$  は  $\mathbb{C} \setminus \{0\}$  上有理型、 $P_{VI}$  は  $\mathbb{C} \setminus \{0, 1\}$  上有理型である。Nevanlinna 理論は伝統的に  $\mathbb{C}$  上有理型関数についての理論であって、既知の結果においても  $P_I, P_{II}, P_{IV}$  の研究が先んじて知られた。

**Proposition 1.1.**  $P_I$  (resp.  $P_{II}, P_{IV}$ ) の任意の解  $y(x)$  は  $T(r, y) = O(r^{5/2})$  (resp.  $O(r^3), O(r^4)$ ) を満たす。ただし  $C > 0$  は  $y(x)$  に無関係なある正数。

ここに  $T(r, f) = m(r, f) + N(r, f)$  は Nevanlinna 理論にいわゆる特性関数であって、 $m, N$  は以下のように定義される：

$$m(r, f) \stackrel{\text{def.}}{=} \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \log^+ |f(re^{i\theta})| d\theta, \quad \log^+ x \stackrel{\text{def.}}{=} \max\{\log x, 0\},$$

$$N(r, f) \stackrel{\text{def.}}{=} \int_0^r \{n(t, f) - n(0, f)\} \frac{dt}{t} + n(0, f) \log r,$$

$n(r, f)$  は  $|x| \leq r$  内での  $f(x)$  の極の個数。

一方  $P_{III}, P_V$  について、modified Painlevé 方程式

$$(P_{V0}) \quad \frac{d^2w}{dz^2} = \left( \frac{1}{2w} + \frac{1}{w-1} \right) \left( \frac{dw}{dz} \right)^2 + (w-1)^2 \left( \alpha w + \frac{\beta}{w} \right) + \gamma e^z + \frac{\delta e^{2z} w(w+1)}{w-1},$$

$$(P_{III0}') \quad \frac{d^2w}{dz^2} = \frac{1}{w} \left( \frac{dw}{dz} \right)^2 + \alpha w^2 + \gamma w^3 + \beta e^z + \frac{\delta e^{2z}}{w},$$

を考える。  $P_{V0}$  (resp.  $P_{III0}'$ ) は  $P_V$  (resp.  $P_{III}$ ) において  $x = e^z, y(e^z) = w(z)$  (resp.  $x = e^z, y(e^z) = w(z)$ ) の後、更に  $w = e^{-z}W, z = Z/2$  として、 $(\alpha/4, \beta/4, \gamma/4, \delta/4, Z, W)$  を  $(\alpha, \beta, \gamma, \delta, z, w)$  と置き直すという変換を施して、解の定義域を  $\mathbb{C} \setminus \{0\}$  から  $\mathbb{C}$  へと取り直した方程式である。これについて、

**Proposition 1.2.** ([3])  $(\alpha, \beta, \gamma, \delta) \in \mathbb{C}^4$  を一組固定した時、 $P_{V0}$  (resp.  $P_{III0}'$ ) の任意の解  $w(z)$  は  $T(r, w) = O(e^{\Lambda r})$  (resp.  $O(e^{\Lambda' r})$ ) を満たす。ただし  $\Lambda = \Lambda_{\alpha, \beta, \gamma, \delta}$  (resp.  $\Lambda' = \Lambda'_{\alpha, \beta, \gamma, \delta}$ ) は  $w'(z)$  によらない正数。

**注記**  $P_{VI}$  についても、 $\mathbb{C}$  上の有理型関数に変換して同様の結果を得た(ドイツ語の)博士論文があるとのことである。

$P_I, P_{II}, P_{IV}$  のように  $P_V, P_{III}, P_{VI}$  をもつと直接的に扱うことはできないの  
 だろうか？これに対して部分的に答えるのが本稿の目的である。

$P_V, P_{III}$  の動かない特異点 ( $= \{0, \infty\}$ ) のまわりに  $\{x \mid \arg x < \varphi\}$  のよう  
 に角領域をとり ( $\{x \mid \phi_1 < \arg x < \phi_2\}$  だったら適当にずらせばよい)、この範  
 囲での  $r \rightarrow \infty$  での振る舞いなどを調べる。

なお、 $P_V$  にあつては

$$(\gamma, \delta) \neq (0, 0) \text{ かつ } (\alpha, \beta) \neq (0, 0).$$

$P_{III}$  にあつては

$$(\alpha, \gamma) \neq (0, 0) \text{ かつ } (\beta, \delta) \neq (0, 0).$$

なる条件を科す。特殊解などへの退化の場合を除いた一般の解を対象を絞る  
 為である。 $y(x)$  を上記の条件を満たす  $P_V$  ないし  $P_{III}$  の解とする。

**Theorem 1.3.** 角領域  $\{x \mid \arg x < \varphi (< \pi)\}$  において、 $P_V$  の解  $y(x)$  が値  
 1 をとる点の個数は  $O(|x|^{C_0})$ 。ただし、 $C_0$  はパラメータ  $(\alpha, \beta, \gamma, \delta)$  によらな  
 いある正数。 $P_{III}$  についても同様。

注記  $P_{III}$  についても同様。 $P_{VI}$  については計算が間に合わなかった。

注記 大雑把に言うと、 $P_V, P_{III}$  を直接取り扱う為、大域的評価をあきら  
 め、動かない特異点の周りの局所的评价をしたものと言える。[3]は大域的評  
 価を得ていることと相違するので注意しておく。

## 2 証明の概要

場合分けして取り扱うことになるが、紙面の都合もあり、以下では  $P_V$  で

$$(1) \quad \delta \neq 0 \text{ かつ } (\alpha, \beta) \neq (0, 0)$$

の場合に絞って計算を進める。次のように10のステップを踏んで見ていく  
 ([2])。流れが見やすいよう、面倒なところはすべて次節にまわす。

### Step.1: 近傍の構成

**Lemma 2.1.** 条件 (1) を満たすパラメータの組  $(\alpha, \beta, \gamma, \delta) \in \mathbb{C}^4$  に対し、  
 $y(x)$  と独立な正数の三つ組  $T_0, \mu \neq 1$  and  $\Delta$  が存在して次を満たす：  
 $|a| > T_0$  なる  $x = a$  に対し、 $|y(a) - \mu| \leq \Delta$  ならば (i)  $|y(x) - \mu| \geq 2\Delta$  on  
 $|x - a| = \epsilon_a$ ; (ii)  $y(x) \neq 1$  in  $|x - a| \leq \epsilon_a$ . ここに、 $\epsilon_a > 0$  は

$$(2) \quad \epsilon_a \leq A_0, \quad \epsilon_a^{-1} \leq A_0(1 + |a| + |y'(a)|),$$

を満たし、 $A_0 > 0$  は  $y(x)$  によらない。

証明は次節に譲る. 3 を見られたい.

### Step.2: パスの構成

**Lemma 2.2.**  $S_\varphi^{L_0} \stackrel{\text{def.}}{=} \{x \mid |\arg x| < \varphi, L_0 \leq |x|\}$  とおく. ただし  $L_0 \stackrel{\text{def.}}{=} \min\{T_0, \frac{A_0}{\sin \varphi}\}$ ,  $0 < \varphi < \pi$ .  $\sigma$  を  $f(\sigma) = 1, |\sigma| > 2L_0$  を満たす任意の点とする. このとき, 以下の性質を満たすパス  $\Gamma(\sigma)$  が存在する:

- (i)  $\Gamma(\sigma) \subset S_\varphi^{L_0}$  は  $a_0(\sigma) \in \partial S_\varphi^{L_0} \cap \{x \mid |x| = L_0\}$  より出でて  $\sigma$  に至る;
- (ii)  $\Gamma(\sigma)$  の長さは  $(\pi + 1)|\sigma|$  を超えない;
- (iii)  $\Gamma(\sigma)$  上  $|y(x) - \mu| > \Delta$ .

証明は次節に譲る. 3 を見られたい.

### Step.3: 補助関数

**Definition**  $P_V$  の解に対し, 補助関数を次のように定める:

$$(3) \quad \Psi(\mu, x) = \frac{x^2 y'(x)^2}{y(x)(y(x) - 1)^2} - \frac{2(1 - \mu)xy'(x)}{(y(x) - 1)(y(x) - \mu)} - 2\alpha y(x) + \frac{2\beta}{y(x)} + \frac{2\gamma x}{y(x) - 1} + \frac{2\delta x^2 y(x)}{(y(x) - 1)^2},$$

ただし  $\mu \neq 0, 1, \infty$ .

$\Psi(\mu, x)$  は次の 1 階線形常微分方程式を満たす:

$$(4) \quad \frac{d\Psi(x)}{dx} - P(x)\Psi(x) = Q(x),$$

$$\begin{aligned} P(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{(1 - \mu)(y(x) - 1)(y(x) + \mu)}{x(y(x) - \mu)^2}, \\ Q(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{2(1 - \mu)^2(y(x) + \mu)y'(x)}{(y(x) - \mu)^3} + \frac{\Theta(x, y(x))}{x(y(x) - \mu)^2}, \\ \Theta(x, y(x)) &\stackrel{\text{def.}}{=} 4(1 - \mu)(y(x) - 1)(\alpha\mu y(x) - \beta) \\ &\quad - 2\gamma x((1 - 2\mu)y(x) + \mu) + 4\delta\mu x^2 y(x). \end{aligned}$$

**Lemma 2.3.**  $x_0$  より出でて  $x$  に至るパス  $\Gamma_0(x)$  上  $y(x) \neq \mu$  ならば, (4) は次のように解かれる:

$$\begin{aligned} \Psi(x) &= \Psi(\mu, x_0)E(x) \\ &\quad - 2(1 - \mu)^2 \left\{ \frac{y(x)}{(y(x) - \mu)^2} + \frac{y(x_0)E(x)}{(y(x_0) - \mu)^2} \right\} \\ &\quad + E(x) \int_{\Gamma} E(x)^{-1} (\Xi_1 - \Xi_2) dx, \end{aligned}$$

where

$$\begin{aligned}
 E(x) & \stackrel{\text{def.}}{=} \exp \left[ (1-\mu) \int_{\Gamma_0(x)} \frac{(y(x)-1)(y(x)+\mu)}{(y(x)-\mu)^2} \frac{dx}{x} \right], \\
 \Xi_1 & \stackrel{\text{def.}}{=} 4(1-\mu) \frac{(y(x)-1)(\alpha\mu y(x)-\beta)}{x(y(x)-\mu)^2} \\
 & \quad - 2\gamma \frac{((1-2\mu)y(x)+\mu)}{(y(x)-\mu)^2} + 4\delta\mu x \frac{y(x)}{(y(x)-\mu)^2}, \\
 \Xi_2 & = 2(1-\mu)^3 \frac{y(x)(y(x)-1)(y(x)+\mu)}{x(y(x)-\mu)^4}.
 \end{aligned}$$

#### Step.4: 補助関数の評価

$L_0$  上から出るパスの始点で  $y(x) = \mu, 0, 1, \infty$  であっては困るので、その場合は  $y(x) \neq \mu, 0, 1, \infty$  なるよう  $L_0$  をほんの少し大きくとっておく。

**Lemma 2.4.** 1-点  $x = \sigma$  i.e.  $y(\sigma) = 1$  と  $|\sigma| > 2L_0$  に対し、 $\Psi(\mu, x)$  は次のように抑えられる:  $|\Psi(\mu, x)| \leq K_0|x|^{C_0}$  in  $U(\sigma) = \{x \mid |x - \sigma| < \eta(\sigma)\}$  with

$$\eta(\sigma) \stackrel{\text{def.}}{=} \sup \left\{ \eta \mid |y(x) - 1| < \frac{|\mu - 1|}{2} \text{ for } |x - \sigma| < \eta < 1 \right\},$$

$C_0 > 1$  は  $\sigma$  や  $y(x)$  によらず、 $K_0$  は  $\sigma$  によらない。

証明は次節に譲る。3 を見られたい。

#### Step.5: Lemma の適用

条件 (1) の下、 $P_V$  の任意の解に対し、ある 1-点  $\sigma \in S_\phi^{2L_0}$  をとる。  $y(x) - 1 = Y(x)$  とおく。このとき、ここまでのステップにより、 $|\Psi(\mu, x)| \stackrel{\text{def.}}{\leq} K_0|x|^{C_0}$  および  $|1 - \mu + Y(x)| \neq 0$  in  $U(\sigma)$  を得る。

#### Step.6: 準備 (1).

**Lemma 2.5.**  $x - \sigma = t$  とし、 $Y_\sigma(t) \stackrel{\text{def.}}{=} Y(x) = y(x) - 1$  とおくと、

$$\frac{dY_\sigma(t)}{dt} = \pm(-2\delta)^{1/2}(1 + h_\sigma^\pm(t)),$$

ただし、

$$\begin{aligned}
 h_{\sigma}^{\pm}(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} (1 + Y_{\sigma}(t)) \left\{ (1 + F_{\sigma}(t))^{1/2} \right. \\
 &\quad \left. \pm \frac{(-2\delta)^{-1/2} (1 - \mu) Y_{\sigma}(t) (1 - Y_{\sigma}(t))}{1 + Y_{\sigma}(t) \quad 1 - \mu + Y_{\sigma}(t)} \right\} - 1, \\
 F_{\sigma}(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{j_{1\sigma}(t)}{\sigma + t} + \frac{j_{2\sigma}(t)}{(\sigma + t)^2}, \\
 j_{1\sigma}(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{\gamma Y_{\sigma}(t)}{\delta(1 + Y_{\sigma}(t))}, \\
 j_{2\sigma}(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} -\frac{\alpha Y_{\sigma}(t)^2}{\delta} + \frac{\beta Y_{\sigma}(t)^2}{\delta(1 + Y_{\sigma}(t))^2} \\
 &\quad - \frac{(1 - \mu)^2 Y_{\sigma}(t)^2}{2\delta(1 - \mu + Y_{\sigma}(t))^2} - \frac{Y_{\sigma}(t)^2 \Psi_{\sigma}(\mu, t)}{2\delta(1 + Y_{\sigma}(t))}, \\
 \Psi_{\sigma}(\mu, t) &\stackrel{\text{def.}}{=} \Psi(\mu, x).
 \end{aligned}$$

証明は次節に譲る. 3 を見られたい.

### Step.7: 準備 (2).

前2つのステップを踏まえて、

**Lemma 2.6.**  $|t| < \frac{1}{3}$  と  $\sigma$  によらない十分小さい正数  $b$  に対し、 $|Y_{\sigma}(t)| \leq b|x|^{-P}$ ,  $P \stackrel{\text{def.}}{=} \frac{C_0}{2}$  とすると、このとき  $|t| < \frac{1}{3}$  に対し  $|h_{\sigma}^{\pm}(t)| < \frac{1}{2}$ .

証明は次節に譲る. 3 を見られたい.

### Step.8: 局所的評価

**Definition.** 正数  $\eta_0$  を次式で定める:

$$(5) \quad \eta_0 \stackrel{\text{def.}}{=} \sup \{ \eta \mid |Y_{\sigma}(t)| \leq b|x|^{-P} \text{ is valid for } |t| < \eta < \frac{1}{3} \}$$

なお、 $y(\sigma) = 1$  より  $Y_{\sigma}(0) = 0$  である.  $0 < \eta_0 \leq \frac{1}{3}$  であるからである.

**Lemma 2.7.**  $|t| < \eta_0$  のとき、 $|Y_{\sigma}(t)| \leq b|x|^{-P}$  であって、このとき次の評価が得られる:

$$\frac{1}{4} |2\delta|^{1/2} |t| \leq |Y_{\sigma}(t)| \leq \frac{7}{4} |2\delta|^{1/2} |t|.$$

*Proof.*

$$\frac{dY_{\sigma}(t)}{dt} = \pm (-2\delta)^{1/2} (1 + h_{\sigma}^{\pm}(t)) \quad , |h_{\sigma}^{\pm}(t)| < \frac{1}{2},$$

であって、これより

$$\frac{dY_{\sigma}(t)}{dt} \mp (-2\delta)^{1/2} = \pm (-2\delta)^{1/2} h_{\sigma}^{\pm}(t),$$

を得る. 積分すれば

$$Y_\sigma(t) \mp (-2\delta)^{1/2}|t| = \pm(-2\delta)^{1/2} \int_0^t h_\sigma^\pm(t) dt.$$

これより次の評価が得られる:

$$|Y_\sigma(t) \mp (-2\delta)^{1/2}|t| \leq |2\delta|^{1/2} \int_0^t |h_\sigma^\pm(t)| dt \leq \frac{1}{2}|2\delta|^{1/2}|t|.$$

これより Lemma の結果を得る. //qed.

### Step.9: 半径の評価

半径  $\eta_0$  を評価する.

**Lemma 2.8.**  $|\sigma| > M \stackrel{\text{def.}}{=} \left(\frac{3b}{2|2\delta|^{1/2}}\right)^{1/P} + 2L_0$  のとき,  $\eta_0 \geq \kappa(\sigma) \stackrel{\text{def.}}{=} \frac{b|\sigma|^{-P}}{2|2\delta|^{1/2}}$ ,  $\kappa(\sigma) < \frac{1}{3}$  が成り立つ.

*Proof.* 背理法で示す. 十分大きい  $|\sigma|$  に対し,

$$|\sigma| > \left(\frac{3b}{2|2\delta|^{1/2}}\right)^{1/P} + 2L_0$$

ならば  $\frac{1}{3} < \frac{b|\sigma|^{-P}}{2|2\delta|^{1/2}}$  かつ  $|\sigma| > 2L_0$ .  $\eta_0 \geq \kappa(\sigma)$  を示したいので, 逆に

$$\eta_0 < \frac{b|\sigma|^{-P}}{2|2\delta|^{1/2}}$$

と仮定すると,  $|t| < \eta_0 < \frac{1}{3}$  に対し

$$|Y_\sigma(t)| \leq \frac{7}{4}|2\delta|^{1/2}|t| \leq \frac{7}{4}|2\delta|^{1/2}\eta_0 \leq \frac{7}{8}b|\sigma|^{-P}.$$

これは  $\eta_0$  が (5) の条件を満たす正数の sup として定義されていたことと矛盾. //qed.

### Step.10: 角領域内での値分布

以上より,  $|\sigma| > M, |t| < \kappa(\sigma)$  に対して,  $\frac{1}{4}|2\delta|^{1/2}|t| \leq |Y_\sigma(t)| \leq \frac{7}{4}|2\delta|^{1/2}|t|$  なる評価が得られる. これより  $|y(\sigma) - 1| > 0$  for  $0 < |x - \sigma| < \kappa(\sigma)$ . 故に,  $\mu(\cdot)$  で面積を表すことにすると, 1-点の数は次のように評価される:

$$\begin{aligned} & \#\{\sigma | y(\sigma) = 1, \sigma \in S_\varphi^r \setminus S_\varphi^{2L_0}\} \\ & \leq \frac{\mu(S_\varphi^r \setminus S_\varphi^{2L_0})}{\min_{\sigma \in S_\varphi^r \setminus S_\varphi^{2L_0}} \pi \kappa(\sigma)^2} \leq \frac{\mu(S_\varphi^r)}{\pi \kappa(r)^2} = \frac{\varphi r^2}{\frac{\pi b^2}{8\delta^2} r^{-2P}} = O(r^{2P+2}). \quad //qed. \end{aligned}$$

### 3 各補題の証明

#### Proof of Lemma 2.1

まず次の Lemma を示す：

#### Lemma 3.1.

$$(6) \quad \ddot{u} = g_1(t, u)\dot{u}^2 - g_2(t, u)\dot{u} + 1 + g_0(t, u) \quad (\dot{\phantom{u}} = \frac{d}{dt}),$$

$u(t)$  を  $t = 0$  付近での (6) の任意の解とし、 $g_j(t, u) (j = 0, 1, 2)$  は  $D_0 = \{(t, u) \in \mathbb{C} \mid |t| < 1, |u| < R_0\}$ ,  $0 < R_0 < 1$  で解析的とする。ある正数  $K$  があつて  $|g_0(t, u)| < \frac{1}{200}$ ,  $|g_1(t, u)| < K$ ,  $|g_2(t, u)| < K$  in  $D_0$  なるとき、 $\theta \stackrel{\text{def.}}{=} \min\{4^{-1}R_0^{1/2}, (200K)^{-1/2}, (200K)^{-1}\}$ . ととる。このとき  $|u(0)| \leq \frac{1}{3}\theta^2$ . ならば円盤  $|t| < \rho_0$  内で  $|u(t)| \leq 15\theta^2$  かつ円  $|t| = \frac{3}{4}\rho_0$  上で  $|u(t)| \geq \theta^2/3$  となる。ただし、

$$\rho_0 = \begin{cases} 4\theta & \text{if } |\dot{u}(0)| \leq 0, \\ \frac{(4/3)\theta^2}{|\dot{u}(0)|} & \text{if } |\dot{u}(0)| > 0. \end{cases}$$

*Proof.*  $|\dot{u}(0)| \leq \theta$  のとき：

$$\eta_0 \stackrel{\text{def.}}{=} \sup\{\eta \mid |u(t)| \leq 15\theta^2, |\dot{u}(t)| \leq 6\theta \text{ for } |t| < \eta\}.$$

$\eta_0 < 4\theta$  とおく。このとき  $\eta_0 < 4\theta \leq R_0^{1/2} < 1$  であつて、 $|t| < \eta_0$  に対し、 $(t, u(t)) \in D_0$  で  $|g_0(t, u)| < \frac{1}{200}$ ,  $|g_1(t, u)|, |g_2(t, u)| < K$  を満たす。これより、

$$\begin{aligned} (7) \quad |\dot{v}(t)| &= \left| \int_0^t ds \{g_1(s, u(s))\dot{u}(s)^2 - g_2(s, u(s))\dot{u}(s) + g_0(s, u(s))\} \right| \\ &\leq \int_0^t |ds| \left[ K\{(6\theta)^2 + 6\theta\} + \frac{1}{200} \right] \\ &\leq \frac{1}{200}(6^2 + 6 + 1)|t| < \frac{4}{200}(6^2 + 6 + 1)\theta, \\ |v(t)| &= \frac{200^{-1}}{2}(6^2 + 6 + 1)|t|^2 \leq \frac{4^2 200^{-1}}{2}(6^2 + 6 + 1)\theta^2. \end{aligned}$$

よつて  $|t| < \eta_0$  のとき、

$$\begin{aligned} |\dot{u}(t)| &\leq |\dot{u}(0)| + |t| + |\dot{v}(t)| \\ &\leq (1 + 4 + (6^2 + 6 + 1)4/200)\theta < 5.87\theta, \\ |u(t)| &\leq |u(0)| + |\dot{u}(0)||t| + \frac{1}{2}|t|^2 + |v(t)| \\ &\leq \left(\frac{1}{3} + 4 + \frac{1}{2}4^2 + \frac{1}{2}(6^2 + 6 + 1)4^2/200\right)\theta^2 < 14.1\theta^2, \end{aligned}$$



だがこれは  $\eta_0$  の定義に矛盾. ゆえに  $\eta_0 \geq 4\theta$  であつて、このとき  $|t| < 4\theta (\leq \eta_0)$  に対し、(7)-(8) はやはり成立し、さらに、

$$\begin{aligned} |u(t)| &\geq \frac{|t|^2}{2} - |u(0)| - |\dot{u}(0)||t| - |v(t)| \\ &\geq \left(\frac{3^2}{2} - \frac{1}{3} - 3 - \frac{1}{2}(6^2 + 6 + 1)3^2/200\right)\theta^2 \geq \frac{1}{3}\theta^2 \end{aligned}$$

が円  $|t| = 3\theta$  上で成立.

$|\dot{u}(0)| \leq \kappa\theta, \kappa > 1$  のとき :

$$\eta_1 = \sup_{\text{def.}} \{\eta \mid |u(t)| \leq 15\theta^2, |\dot{u}(t)| \leq 6\kappa\theta \text{ for } |t| < \eta\}.$$

$\eta_1 < \frac{4\theta}{\kappa}$  とおく.  $\eta_1 < 4\theta \leq R_0^{1/2} < 1$  であつて、このとき、 $|t| < \eta_1$  に対し、 $(t, u(t)) \in D_0$  である.  $|g_0(t, u)| < \frac{1}{200}$ ,  $|g_1(t, u)| < K$ ,  $|g_2(t, u)| < K$  を満たす. これより、

$$\begin{aligned} (8) \quad |\dot{v}(t)| &= \left| \int_0^t ds \{g_1(s, u(s))\dot{u}(s)^2 - g_2(s, u(s))\dot{u}(s) + g_0(s, u(s))\} \right| \\ &\leq \int_0^t |ds| \left[ K\{(6\kappa\theta)^2 + 6\kappa\theta\} + \frac{1}{200} \right] \\ &\leq \frac{\kappa^2}{200}(6^2 + 6 + 1)|t| < \frac{4\kappa}{200}(6^2 + 6 + 1)\theta, \\ (9) \quad |v(t)| &= \frac{\kappa^2 200^{-1}}{2}(6^2 + 6 + 1)|t|^2 = \frac{4^2 200^{-1}}{2}(6^2 + 6 + 1)\theta^2. \end{aligned}$$

よつて、 $|t| < \eta_1$  のとき、

$$\begin{aligned} |\dot{u}(t)| &\leq |\dot{u}(0)| + |t| + |\dot{v}(t)| \\ &\leq (1 + 4 + (6^2 + 6 + 1)4/200)\theta < 5.87\theta, \\ |u(t)| &\leq |u(0)| + |\dot{u}(0)||t| + \frac{1}{2}|t|^2 + |v(t)| \\ &\leq \left(\frac{1}{3} + 4 + \frac{1}{2}4^2 + \frac{1}{2}(6^2 + 6 + 1)4^2/200\right)\theta^2 < 14.1\theta^2, \end{aligned}$$

だがこれは  $\eta_1$  の定義に矛盾. ゆえに  $\eta_1 \geq \frac{4}{\kappa}\theta$  であつて、このとき  $|t| < \frac{4}{\kappa}\theta (\leq \eta_1)$  に対し、(8)-(9) はやはり成立し、さらに、

$$\begin{aligned} |u(t)| &\geq |\dot{u}(0)||t| - |u(0)| - \frac{|t|^2}{2} - |v(t)| \\ &\geq \left(1 - \frac{1}{3} - \frac{1}{2} - \frac{1}{2}(6^2 + 6 + 1)1^2/200\right)\theta^2 \geq \frac{1}{3}\theta^2 \end{aligned}$$

が円  $|t| = \frac{1}{\kappa}\theta$  上で成立. //qed.

次に Lemma 2.1 を示す.

*Proof.*  $T_0$  を十分大きくとり、領域  $S_\varphi^{L_0}$  および  $|x| > T_0$  を考える.  $P_V$  において  $u(x) = y(x) - 2$  とおくと、

$$\begin{aligned} \frac{d^2u}{dx^2} &= \left( \frac{1}{2(u+2)} + \frac{1}{u+1} \right) \left( \frac{du}{dx} \right)^2 - \frac{1}{x} \frac{du}{dx} \\ &\quad + \frac{(u+1)^2}{x^2} \left( \alpha(u+2) + \frac{\beta}{(u+2)} \right) + \frac{\gamma(u+2)}{x} + \frac{\delta(u+2)(u+3)}{(u+1)} \end{aligned}$$

' =  $\frac{d}{dx}$  を微分として、上の式は次のように書ける：

$$u'' = G_1(u)u'^2 - x^{-1}u' + 6\delta(1 + H(x, u)),$$

$$H(x, u) = uh_0(u) + \frac{h_1(u)}{x} + \frac{h_2(u)}{x^2},$$

$$h_0(u) \stackrel{\text{def.}}{=} \frac{u-1}{6(u+1)},$$

$$h_1(u) \stackrel{\text{def.}}{=} (6\delta)^{-1}\gamma(u+2),$$

$$h_2(u) \stackrel{\text{def.}}{=} (6\delta)^{-1}(u+1)^2\{\alpha(u+2) + \beta/(u+2)\}.$$

$|u| < \frac{1}{2}$  に対し  $G_1(u)$ ,  $h_j(u)$  ( $j = 0, 1, 2$ ) は有界であることに注意する.  $x = a + (6\delta)^{-1/2}t$  という風にスケールリングを取り替えて、次の形に変形できる：

$$\ddot{u} = G_1(u)\dot{u}^2 - G_2(t)\dot{u} + 1 + G_0(x, u),$$

ただし、

$$G_2(t) = \frac{(6\delta)^{-1/2}}{a + (6\delta)^{-1/2}t},$$

$$G_0(t) = H(a + (6\delta)^{-1/2}t, u).$$

$T_0$  を十分大きく、 $\frac{h_1(u)}{x}$ ,  $\frac{h_2(u)}{x^2}$ ,  $R_0$ ,  $uh_0(u)$  を十分小さくとると、Lemma 3.1 により；具体的には、 $T_0$  に対して、 $\mu = 2$ ,  $\Delta = \frac{1}{3}\theta^2$ ,  $K = \max_{|u|=\mathbb{R}_0}\{|G_1|, |G_2|\}$ ,

$$\epsilon_a = \begin{cases} 4|6\delta|^{-1/2}\theta & \text{if } |y'(a)| \leq |6\delta|^{1/2}\theta, \\ \theta^2/|y'(a)| & \text{if } |y'(a)| > |6\delta|^{1/2}\theta, \end{cases}$$

と取ると、求める結果が得られる. さらに次も言える：

$$\frac{dy}{dx}(a) = \frac{1}{(6\delta)^{-1/2}} \frac{du}{dt}(0) \therefore |\dot{u}(0)| = (6\delta)^{-1/2}|y'(a)|,$$

ただし、 $\theta = \min\{4^{-1}R_0^{1/2}, 200^{-1}K^{-1/2}\} \leq \frac{1}{3}$ . //qed.

## Proof of Lemma 2.2

積分評価に用いるパスを構成する。以下において、 $T_0$ ,  $\mu$ ,  $\Delta$ , and  $A_0$  は Lemma 2.1 で与えた定数とする。

*Proof.*  $|\sigma| > 2L_0$  と仮定する。線分  $I = [2s_0, \sigma]$  をとる。  $I \cap S_\varphi^{L_0} = [s_0, \sigma]$  に沿って (iii) を満たすならば、 $\Gamma(\sigma) = [s_0, \sigma]$  が求めるパスである。

今、(iii) を満たさない、すなわち、 $|y(a_1) - \mu| = \Delta$ ; かつ  $x \in [s_0, a_1] \setminus \{a_1\}$  に対し  $|y(x) - \mu| > \Delta$  を満たす点  $a_1 \in [s_0, \sigma]$  が存在したとすると、Lemma 2.1 により、半円  $c_1: |x - a_1| = \epsilon_{a_1}$ ,  $c_1 \subset S_\varphi^{L_0}$  が取れる。Lemma 2.1 の (ii) により、 $\sigma$  は円  $|x - a_1| = \epsilon_{a_1}$  の外側にある。  $c_1$  の直径を  $[a_1^-, a_1^+]$  と書く。ただし  $a_1^- - \sigma > a_1^+ - \sigma$ .  $\epsilon_{a_1} \leq A_0 \leq L_0$  であるから、もし  $a_1^- \neq [s_0, \sigma]$  ならば、 $c_1$  は弧  $\partial S_\varphi^{L_0} \cap \{x \mid |x| = L_0\}$  と交叉する。線分  $[a_1^-, a_1^+] \cap [s_0, \sigma]$  を弧  $c_1 \cap S_\varphi^{L_0}$  と取り替えれば  $a_0^{(1)} \in \partial S_\varphi^{L_0}$  から出るパス  $\Gamma_1 = ([s_0, \sigma] \cap \{x \mid |x - a_1| > \epsilon_{a_1}\}) \cup (c_1 \cap S_\varphi^{L_0}) (\ni \sigma)$  を得る。このとき  $\Gamma_1$  の  $a_0^{(1)}$  から  $a_1^+$  の部分で (iii) の不等式が成立し、特に  $|y(a_1^+) - \mu| \geq 2\Delta$ .

もし  $\Gamma_1$  に沿って (iii) が成り立つならば、 $\Gamma(\sigma) = \Gamma_1$  でよし、そうでなければ、 $a_1^+$  から出て  $[a_1^+, \sigma] \subset \Gamma_1$  に沿って  $|y(a_2) - \mu| = \Delta$ ; かつ  $[a_1^+, a_2] \setminus \{a_2\}$  上  $|y(x) - \mu| > \Delta$  となる点  $a_2$  まで延ばす。すると、直径  $[a_2^-, a_2^+]$  の半円  $c_2: |x - a_2| = \epsilon_{a_2}$ ,  $c_2 \subset S_\varphi^{L_0}$  が取れる。ただし、 $|a_2^- - \sigma| > |a_2^+ - \sigma|$ .  $a_0^{(2)} \in S_\varphi^{L_0}$  より出でて  $\sigma$  に至るパス  $\Gamma_2 = (\Gamma_1 \cap \{x \mid |x - a_2| > \epsilon_{a_2}\}) \cup (c_2 \cap \{x \mid |x - a_1| > \epsilon_{a_1}\} \cap S_\varphi^{L_0})$  を考えると、少なくとも  $\Gamma_2$  の  $a_0^{(2)}$  から  $a_2^+$  への部分で (iii) の不等式が満たされる。この手続きを繰り返す。

なお、この手続きは有限回で終わる。なぜなら、もし上記手続きが無限に続いたとすると、 $\sum_{n=1}^{\infty} \epsilon_{a_n} \leq |\sigma - s_0|$  及び  $|y(a_n)| \leq \Delta + \mu$  を満たす数列  $\{a_n\}_{n=1}^{\infty} \subset I$  があって、(2) より、 $a_{n_j} \rightarrow a_* \in I$ ,  $y(a_{n_j}) \rightarrow y_* \neq \infty$ ,  $y'(a_{n_j}) \rightarrow \infty$  as  $j \rightarrow \infty$  を満たす部分列  $\{a_{n_j}\}_{j=1}^{\infty}$  が取れるが、 $y(a_*) = y_* \neq \infty$ ,  $y'(a_*) = \infty$  となつて矛盾だからである。よつて有限回の手続きで (i), (iii) を満たすパス  $\Gamma(\sigma)$  が得られる。

$c_j$  ( $j = 1, 2, \dots, l$ ) を、 $\Gamma(\sigma)$  の構成の上で使った中心  $a_j$  の半円とすると、 $\epsilon_{a_j}$  は  $\sum_{j=1}^l \epsilon_{a_j} \leq |\sigma - s_0|$  を満たすので、 $\Gamma(\sigma)$  の長さは次で抑えられる： $|\sigma - s_0| + \pi \sum_{j=1}^l \epsilon_{a_j} \leq (\pi + 1)|\sigma - s_0| \leq (\pi + 1)|\sigma|$ . すなわち (ii) を満たす。これにて Lemma 2.2 が得られた。 //qed.

## Proof of Lemma 2.4

*Proof.* まず exponential 部分の評価を与える。Lemma 2.2 で構成した  $\Gamma(\sigma)$  上で

$$E(x) = \exp \left[ (1 - \mu) \int_{\Gamma(\sigma)} \frac{dx (y(x) - 1)(y(x) + \mu)}{x (y(x) - \mu)^2} \right]$$

かつ

$$|1 - \mu| \left| \frac{(y(x) - 1)(y(x) + \mu)}{(y(x) - \mu)^2} \right| \leq B_0.$$

であるから、

$$|E(x)^\pm| \leq \exp \left[ B_0 \int_{\Gamma(\sigma)} \frac{|dx|}{|x|} \right] \leq |x|^{C_1}.$$

故に、補助関数

$$\begin{aligned} \Psi(\mu, x) &= \Psi(\mu, x_0)E(x) \\ &\quad - 2(1 - \mu)^2 \left\{ \frac{y(x)}{(y(x) - \mu)^2} + \frac{y(x_0)E(x)}{(y(x_0) - \mu)^2} \right\} \\ &\quad + E(x) \int_{\Gamma} dx E(x)^{-1} (\Xi_1 - \Xi_2), \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \Xi_1 &= 4(1 - \mu) \frac{(y(x) - 1)(\alpha\mu y(x) - \beta)}{x(y(x) - \mu)^2} \\ &\quad - 2\gamma \frac{((1 - 2\mu)y(x) + \mu)}{(y(x) - \mu)^2} + 4\delta\mu x \frac{y(x)}{(y(x) - \mu)^2}, \\ \Xi_2 &= 2(1 - \mu)^3 \frac{y(x)(y(x) - 1)(y(x) + \mu)}{x(y(x) - \mu)^4}, \end{aligned}$$

に対し、その評価として次を得る： $\Psi(\mu, x) \leq K_0|x|^{C_0}$ . //qed.

### Proof of Lemma 2.5

補助関数の定義式(3)を $y'$ の2次方程式としてみると、 $Ay'^2 - By' + C = 0$ .  
ただし、

$$\begin{aligned} A &= \frac{x^2}{y(x)\{y(x) - 1\}^2}, \quad B = \frac{2(1 - \mu)x}{\{y(x) - 1\}\{y(x) - \mu\}}, \\ C &= -2\alpha y(x) + \frac{2\beta}{y(x)} + \frac{2\gamma x}{y(x) - 1} + \frac{2\delta x^2 y(x)}{\{y(x) - 1\}^2} - \Psi(\mu, x). \end{aligned}$$

上記で更に $y(x) - 1 = Y(x)$ とおくと、 $AY'^2 - BY' + C = 0$ . ただし、

$$\begin{aligned} A &= \frac{x^2}{Y(x)^2\{1 + Y(x)\}}, \quad B = \frac{2(1 - \mu)x}{Y(x)\{1 - \mu + Y(x)\}}, \\ C &= -2\alpha\{1 + Y(x)\} + \frac{2\beta}{1 + Y(x)} + \frac{2\gamma x}{Y(x)} + \frac{2\delta x^2\{1 + Y(x)\}}{Y(x)^2} - \Psi(\mu, x). \end{aligned}$$

この2次方程式を解くと、

$$(10) \quad Y' = \frac{B}{2A} \pm \frac{(B^2 - 4AC)^{1/2}}{2A}.$$

$$\begin{aligned}\frac{B}{2A} &= \frac{(1-\mu)Y(1+Y)}{x(1-\mu+Y)}, \\ \frac{B^2-4AC}{(2A)^2} &= -2\delta(1+Y)^2 - \frac{2\gamma Y(1+Y)}{x} \\ &\quad + \frac{1}{x^2} \left[ 2\alpha Y^2(1+Y)^2 - 2\beta Y^2 + \frac{(1-\mu)^2 Y^2(1+Y)^2}{(1-\mu+Y)^2} + Y^2(1+Y)\Psi \right].\end{aligned}$$

上式を見ると、(10)の右辺は概ね  $|-2\delta|^{1/2}$  程度、すなわち、十分大きな  $x$  と十分小さな  $Y$  に対し  $Y' \simeq |-2\delta|^{1/2}$ 、であって、若干の計算の後、

$$\frac{dY(x)}{dx} = \pm(-2\delta)^{1/2}(1+h^\pm(x))$$

が得られる。ただし、

$$\begin{aligned}h^\pm(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} (1+Y(x)) \left\{ (1+F(x))^{1/2} \pm \frac{(-2\delta)^{-1/2} B}{1+Y(x) 2A} \right\} - 1, \\ F(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{j_1(x)}{x} + \frac{j_2(x)}{x^2}, \\ j_1(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} \frac{\gamma Y(x)}{\delta(1+Y(x))}, \\ j_2(x) &\stackrel{\text{def.}}{=} -\frac{\alpha Y(x)^2}{\delta} + \frac{\beta Y(x)^2}{\delta(1+Y(x))^2} \\ &\quad - \frac{(1-\mu)^2 Y(x)^2}{2\delta(1-\mu+Y(x))^2} - \frac{Y(x)^2 \Psi(\mu, x)}{2\delta(1+Y(x))},\end{aligned}$$

であって、 $F(x) \rightarrow 0$  のとき  $(1+F(x))^{1/2}$  tends to 1 なるよう分枝をとる。これより、 $t = x - \sigma$  を局所変数にとれば、Lemma 2.5 の結果を得る：

$$\frac{dY_\sigma(t)}{dt} = \pm(-2\delta)^{1/2}(1+h_\sigma^\pm(t)),$$

$$\begin{aligned}Y_\sigma(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} Y(\sigma+t), \quad h_\sigma^\pm(t) \stackrel{\text{def.}}{=} h^\pm(\sigma+t), \quad F_\sigma(t) \stackrel{\text{def.}}{=} F(\sigma+t), \\ j_{1\sigma}(t) &\stackrel{\text{def.}}{=} j_1(\sigma+t), \quad j_{2\sigma}(t) \stackrel{\text{def.}}{=} j_2(\sigma+t), \quad \Psi_\sigma(\mu, t) \stackrel{\text{def.}}{=} \Psi(\mu, \sigma+t).\end{aligned}$$

## Proof of Lemma 2.6

*Proof.*  $|\sigma| > 2L_0$ ,  $P = C_0/2$  であって、条件の下で  $|t| < \frac{1}{3}$  に対し、 $|Y_\sigma(t)| \leq b|x|^{-P} \leq bL_0^{-P}$ ,  $|1-\mu+Y_\sigma(t)| \geq |1-\mu| - |Y_\sigma(t)| \geq |1-\mu| - bL_0^{-P}$ ,  $|1+Y_\sigma(t)| \geq 1 - bL_0^{-P}$ ,  $|\Psi_\sigma(\mu, t)| \leq K_0|x|^{C_0}$  であるから、 $F_\sigma(t)$  の各項につ

いて次のように評価できる：

$$\begin{aligned} \left| \frac{\gamma Y_\sigma(t)}{\delta(1+Y_\sigma(t))} \right| &\leq \left| \frac{\gamma}{\delta} \right| \frac{bL_0^{-P}}{1-bL_0^{-P}}, \\ \left| -\frac{\alpha Y_\sigma(t)^2}{\delta} \right| &\leq \left| \frac{\alpha}{\delta} \right| b^2 L_0^{-2P}, \\ \left| \frac{\beta Y_\sigma(t)^2}{\delta(1+Y_\sigma(t))^2} \right| &\leq \left| \frac{\beta}{\delta} \right| \frac{b^2 L_0^{-2P}}{(1-bL_0^{-P})^2}, \\ \left| \frac{(1-\mu)^2 Y_\sigma(t)^2}{2\delta(1-\mu+Y_\sigma(t))^2} \right| &\leq \left| \frac{(1-\mu)^2}{2\delta} \right| \frac{b^2 L_0^{-2P}}{(|1-\mu|-bL_0^{-P})^2}, \\ \left| \frac{Y_\sigma(t)^2 \Psi_\sigma(\mu, t)}{2\delta(1+Y_\sigma(t))} \right| &\leq \frac{1}{|2\delta|} \frac{b^2 K_0}{1-bL_0^{-P}}. \end{aligned}$$

$F_\sigma(t)$  が十分小さくなるよう、正数  $b$  を十分小さく取ると、 $b$  の取り方は  $\sigma$  によらないから（上の各評価式で  $\sigma$  は右辺に現れない）、

$$h^\pm(x) = (1+Y(x)) \left\{ (1+F(x))^{1/2} \pm \frac{(-2\delta)^{-1/2} B}{1+Y(x) 2A} \right\} - 1$$

より、 $b$  を十分小さく取って、 $|h_\sigma^\pm(t)| < \frac{1}{2}$  となるようにできる。//qed.

## 参考文献

- [1] Gromak, V.I., Laine, I. and Shimomura, S., *Nevanlinna theory and Painlevé differential equations*, de Gruyter, Berlin, New York, 2002.
- [2] Sasaki, Y., *Thesis*, Univ. Tokyo, 2003.
- [3] Shimomura, S., *Growth of modified Painlevé transcendents of the fifth and the third kind*, to appear.
- [4] Shimomura, S., *Lower estimates for the Growth of Painlevé transcendents*, Funkcial. Ekvac., to appear.
- [5] Shimomura, S., *Nevanlinna 理論の微分方程式への応用*, Rokko Lectures in Mathematics 14, 神戸大学理学部数学教室, 2003.